



京都大学 総合人間学部広報

特集 学生時代の思い出

フランス遊学記、あるいは反面教師という教師の半面	稲垣 直樹	2
「されどわれらが日々」	奥田 敏広	5
そうそう暢気でいられない?	川島 昭夫	7
私の学生時代	木村 崇	10
統計学事始の頃	長屋 政勝	13
学生時代の思い出	西井 正弘	16
あなた方ご自身の思い出を	服部 文昭	19
雑感ー京大出身者として、教員としてー	カール・ベッカー	22
曲折 いまとむかし	堀 智孝	27

研究・教育活動紹介

文化財修復、そして古建築研究	窪寺 茂	29
スパイ・ハント	ブライアン・マサル・ハヤシ	30
二つの「セルビア」	三谷 恵子	31

特集

学生時代の思い出

フランス遊学記、あるいは反面教師という教師の半面

稲垣 直樹（文化環境学系）



「学生時代の思い出」というテーマでなにか書くように。そんなご依頼をいただいて、お引き受けするにはしたが、いざ執筆という段になって、はたと困ってしまった。

学生時代あるいは青春時代は誰にとっても限りなくとおしく、その思い出のバイアスが最初からかかっている。おまけに、いわゆる時の浄化作用というものが働いて、たいてい過度に美化されている。かてて加えて、筆者が教師で読者が学生という、本稿掲載のメディアの性質からほぼ想定される、テキストの発信者と受信者の関係がある。そうした関係からすれば、よく言えば教育的な、悪く言えば「オレがいま格好がついているのは若い頃こんな勉強をしたからだ」式の教訓的な手前味噌になるのが落ちである。

フランスの「蛙跳び発想」といわれるものがある。普段は満遍なく目配りをしながら、論理を着実に積みあげるのだが、あるとき、エィヤァ！と、積みあげてきた論理と何の関係もない飛躍をする。そして、その飛躍した論理しか目に入らなくなる結果、とんでもなく突出した怪物みたいな部分ができあがり、全体の調和がもののみごとに崩れさる。旧市街の、舗石を敷

き詰めた凹凸の路面を、車体を水平に保ったまま駆け抜けるため（だけ）に、かつてシトロエンが開発したエア・サスペンション。これが故障しようものなら、熟練したメカニックもお手上げで、エア・サスをまるごと取り替えて、修理代、しめて新車価格の5分の1といった、目の玉が飛び出るようなありさまだった（現在、C5（セ・サンク）だけに装備されているハイドラクティブⅢがその進化形だが、さすがにメンテナンス性もコスト・パフォーマンスも格段に進化した）。

日本語の慣用表現に「清水の舞台から飛び降りる」というものがある。江戸時代、願をかけるために、本当に清水寺の舞台から老若男女とはいわないが、若い男女が飛び降りた記録が残っているという。だいたい、許されざる恋なんぞをした男女が飛び降りて、奇跡的に怪我をしなければ、神仏の加護（当時は、むろん、神仏習合）があったということで、晴れて夫婦（めおと）になれたのだそうである。清水寺に行けば分るが、今は竹槍を並べたみたいな柵が舞台の真下に張りめぐらされて、地獄の針の山もかくや、といった恐ろしげな様子だ。あと先見ずに飛び降りてはいけない（あと先見ても飛び降りてはいけない）。

フランスの「蛙跳び発想」と日本の「清水の舞台から飛び降りる」を足して2で割るかわり

に2を掛けたくらいの、とんでもない覚悟で、普段は極度に理性的な私は理性をかなぐり捨てることにした。つまり、思いっきり開きなおることにしたのである。

とまあ、こんな前置きを長々としなければならぬのも、これから述べる内容があまりにも突飛だからだ。事実関係について嘘は書かないが、とにかく、まあ、すさまじい自慢話に（結果として）なってしまうことがほぼ予測されるのである。

さて、ここからが私の「学生時代の思い出」だ。経済的に私が最も輝いていた、文字どおりの黄金時代（その後、くすみにくすんで、いまや燻し銀以下の状態であることはいうまでもない）。いずれも人のお金で私はフランスに2回留学したが、そのうちの1回目のことである。なんと1年間フランスのほんものの城（シャトー）に住んだのである。

18世紀に建てられ、19世紀に増築された城。フランスには石の家の伝統があり、外側は石積みで何百年もそのまま維持し、内側は各時代に合わせて、最も快適な生活ができるようにリフォームする。この城は私が住んだときには、そのほぼ10年前のリフォームによって、全室セントラルヒーティング付き、縦横10メートル掛ける20メートルの温水プール付き、テニスコート付き、おまけに、奥さんがスウェーデン人だったから、地下に6畳くらいの広さのサウナまであった。フランスの城の条件に、屋敷の門から建物まで5分や10分はかかること、船遊びができる池があること、広大な庭に、同じく広大な森があることなどがあるが、これらの条件をすべて満

たした正真正銘のシャトーだった。

なぜ、こんな城に住むことになったのか。実は瓢箪から駒だった。

国際ロータリー財団の奨学生として留学したが、その場合、受入先の都市（私の場合はパリから北へ130キロの中堅都市アミアン）のロータリークラブで、いわば私の受入係のロータリークラブ員が指名される。その受入係の方が城持ちだったのだ。ホームステイ希望と言いだしたら、「それじゃ、うちに居たら？ 広いから」と、あてがわれたのが30畳のゲストルームであった。

留学したのは修士課程で、授業は2週間に1コマ（2時間）だけ。旅行をしたり、パリに遊びに行ったりする以外は朝から晩まで家にいた。いやはや、フランスの食事はすさまじい。まず、城持ちの社長さんがオフィス兼工場から必ず昼に一旦帰宅し、子供たちも学校から一旦帰宅し、みんなで1時間半かかってフルコースを平らげる。夜は夜で2時間かかってフルコースに舌鼓を打ち、そのあとサロンで3時間くらい会話を楽しむ。なんと1日に少なくとも6時間半は真剣勝負の、本場もののフランス語会話をしてい



最初の留学(1974-75年)で筆者が1年を過ごした城

た勘定になる。それを1年間続けたのだから、よく体が、というよりも頭がもったものだった。

フランスで産業革命が起こったのは19世紀前半のこと。だから、多くのブルジョアジーは19世紀に成りあがっている。この城持ちの社長さんの会社も創業は19世紀半ばだった。四代前からブルジョアをやっていると、その能力と礼節と教養の蓄積は計り知れない。城持ちの社長さんの博覧強記ぶりには舌を巻いた。夕食は千客万来でいろいろな分野の客がテーブルを囲んだが、政治、経済、国際情勢、歴史、科学、文学、美術、音楽、スポーツ……ありとあらゆる会話に、出たとこ勝負でついて行くどころか、いつの間にか上手にイニシアティブを取っていた（ちゃんと私にも会話を振ってくれたおかげで、油断も隙もなかった）。

17世紀フランスの古典悲劇『ブリタニキウス』を今コメディ＝フランセーズで上演してい



1974年の筆者（ベルリンにて）

るなどという話が出れば、『ブリタニキウス』の一節を朗々と暗誦しながら、作者のラシーヌについて客と丁々発止と渡りあう。日本の近世・近現代史くらいは頭に入っていて、当時「エコノミック・アニマル」などと言われていた日本の企業戦士たちを封建制の主従関係と儒教を引きあいに出して語ったりした。

何でも知ろうとし、何でも知って、何についても一家言を持っている。1年もレクチャーを受けていると、発想の傾向がしだいに分かってきた。これほどの百科全書的教養人でも（あるいは、だからこそ）、思考のパターン化は免れないのだった。何でも知り、何についても意見を持つということは、逆に世界のすべてを秩序立て、ヒエラルキー化し、整理し、一元的な自分の世界観に正確に位置づけなければ気が済まないことである。おまけに、微笑ましい「蛙跳び発想」もなかった。つまり、よい意味でのいい加減さ、鷹揚さ、「ま、いいっか」がなかった。多角的なものの見方、価値観の多様性に対する想像力がなかったのだ。

思えば、この1回目の留学で本業の勉強以外は悉く（おそらく、一生分）やり尽くしてしまった。そのおかげで、フランス政府から3年間お金をもらった2回目の留学では、勉強以外にはまるで興味が湧かなくなっていた。パリに着いた翌日、国立図書館で文献渉猟に没頭する自分の姿にふと気がついて愕然としたのだった、これから先、渺茫と続くだろう自分の人生の眇々として耐えがたい凡庸さに……。

（いながき なおき）

「されどわれらが日々」

奥田 敏広 (人間科学系)



誰しも自分を中心に物事を見がちであるが、そういう偏見があると思いつつ私は、自分が（大学院と）大学時代を過ごした1980年前後の10年近くが時代の大きな転換点

であったという想いを強くもっている。当時そのようなことを考えたり感じたりしたわけではなかったが、今振り返るとそのような時代の特徴と、自分自身が紛れもなくその時代の子供であったことが、まざまざと感じられるのである。

もちろんそれほど変わっていないこともあり、たとえば当時からすでに合コンというようなものも存在し、私も参加したものである。しかし、たとえば、大学のキャンパスや私が下宿していた一乗寺界隈の様子は、当時と今では一変している。当時の吉田食堂は、今の吉田寮のような煤のはったまだ木造の建物であったし、一乗寺商店街の中ほどには、寅さんやポルノ、気鋭の独立系監督の特集などをオールナイトで上映する格安の京一会館などがあった。当時の猥雑とでも言うべき雰囲気比べすべてが整備された新キャンパスを見ると、隔世の感が否めない。

しかし、何ととっても最大の違いは、当時まだその最後の名残を残していた学生運動の存在に違いない。私たちの入試の日にはまだ机を積み上げたバリケードで門が一部閉鎖されていたのである。そして、京大生なら誰しもその洗礼を受けたクラス授業の前のあのアジ演説。何ととってもこのアジ演説における信条の爆発的吐露に、当時の私たちは、政治的なものに限らず

決定的な影響を受けたものであり、少なくとも私は、その乱暴で荒っぽい理論や行動に生理的な嫌悪を感じつつ、その圧倒的なエネルギーとでも言うべきものに、引け目を感じざるを得なかった。

というのも、彼らが体制や権威や教養にあんなにも反発するのも、それらがまだ何らかの実体として存在していたからこそであり、一方私はそれらをほとんどリアルなものとして実感できなかったからである。そのような学生運動の担い手たちは、いかにヒッピー生活や長髪やフォークソングに権威的な人格的教養主義批判の、そして「反近代」のメッセージを込めていたにせよ、まだ「近代」化の手段としての教養を反発と破壊として体験できたのである。それは「反近代」という形を取った戦後日本の「近代」であり、そのような団塊の世代の背中を私はある種の羨望をもって仰ぎ見ずにはいられなかった。

しかし、私たちの受け取り方には、すでに時代は変わりつつあるという印もまたはっきりと見られた。すなわち、私たちが酔っ払ったときなど、仲間内で一番盛り上がるのは、それらのアジ演説の物真似芸なのである。芸能人や名物教師が物真似の対象になるのはよくあるが、私たちの場合それはアジ演説の闘士なのである。およそパロディーがすべてそうであるように、そこには対象に対する讃嘆や敬意と同時にまた、茶化しと批判が込められており、そういうものとしてのアジ演説の物真似こそ、そしてそれがもてはやされるという状態こそ、学生運動の担い手としての団塊の世代に対する私たちの関係

が、象徴的に表れていた。思えば当時、人格的教養主義の最後の担い手というべき旧制学校出身の老教授たちが退官していき、反発と破壊でもなければ、パロディーでもない、まさに「新人類」と呼ばれる世代が巷に登場しつつあった。

村上龍が若者のセックスとドラッグの世界を描きセンセーショナルな注目を集め、芥川賞を受賞したのもこの頃で、私が大学1回生の時だったが、これも今振り返ってみれば、そのような学生運動の文学版のように思われる。なるほど、ここに政治的なメッセージは込められていないし、個人的に私はこの作家が大嫌いであり、そのエンターテインメント的な作品も評価していない。これが文学として認められるなら自分の文学観は根本から間違っている、と当時の文学研究を志しつつあった私は何日間も煩悶したものである。しかし、この作品の受賞は、それ以後、美大生や音大生の受賞が一般的となり、ひいては現在のネット文学まで続く文学の大衆化、ギルド的ないし象牙の塔的な文壇の希薄化の端緒となったことは確かであり、その破壊的で革新的な側面は認めざるをえないであろう。しかも、重要なのは、そこには破壊と同時にまさに破壊という形をとったある種の継承が存在したという事実である。すなわち、そのアクロバットのセックス描写の誇示は、政治的ではないにしても、体制や権威に対する反発と

いう意味できわめて社会的なものなのであった。それは、吉本隆明と並ぶ戦後文学の教祖的存在であった埴谷雄高が当時すでにこの作品を激賞したという事実や、その後今日に至るまでのこの作家の社会的なテーマへの傾斜が示している（まさに私が我慢ならなかったものも、このような社会性にもかかわらず、審美的・非道徳的で非社会的な世界に遊んでいるかのような作者の気取りであった）。

一方、そのような過渡期における大学の知的雰囲気とそこにおける自分探しとでも言うべきものが描かれていて私が愛読したのは、柴田翔の『されどわれらが日々』である。なるほどこの作品が芥川賞を受けたのはすでに1960年代でありその背景は日米安保条約であるが、私の時代が学生運動のエピローグだとすれば、それはいわばプロローグであり、私はそこに自分を投影できたのである。また、作品として見るなら、たとえば作者と同世代の大江健三郎などの力量と比べると明らかに見劣りはするが、これもまた私が感傷的に感情移入するのを妨げはしなかった。あとで、この作者が私の目指していたドイツ文学の研究者であることを知ったが（後に作者が東大の文学部長になったとき、口さがないマスコミは反抗世代が管理職に就いたと騒いだ）、たしかに、当時の大学の「語学教師」こそ、語学学校であった旧制高校の「教養」をもっとも愚直に継承していたのであり、そういう要素が、滅び行くものに惹かれる私の感性に訴えたのかもしれない。しかし、少なくともそれは、知識が単なる情報やマニュアルではなく体系的・人格的な教養でありえた時代、今はほとんど消え失せてしまった時代の貴重な証言のひとつであり、その白鳥の歌であった。

（おくだ としひろ）



1980年夏ミュンヘン

そうそう暢気でいられない？

川島 昭夫（国際文明学系）



バリケード封鎖、といっても何のことかわからない人も多いのではないか。入学したばかりの大学は長期ストライキ決行中で、吉田キャンパス（当時は、C構内とも呼んでいたように思う）を一周して鉄条網がはりめぐらされていた。その、進入を阻むかのようなものものしさと、あちこちに大書されていた「解放区」という文字に、すこし当惑をおぼえながら旧A号館正面と向きあったのを記憶している。

いわゆる学園闘争のさなかだったのである。その年、つまり1969年には、東京大学の入試が中止され、そのため予定を変更して京都大学を受験した当事者のひとりであったわけだから、そのことを認識していなかったわけではない。ただ九州南端の小さな高校で、暢気な受験生活（とはおかしな表現かもしれないが、受験校に学んだ最大のメリットは、大学受験などそれほど騒ぐほどのものでもないということをくりかえし教わったことで、結果、暢気な受験生活という心境に事実達していた）を終えたばかりの身には、人ごとのようにしか思えなかった。

授業もなく教師も見ない、建物と人ばかりの大学は、たしかに自由な解放感がないわけではなかった。しかし、あらゆる権力の外からの侵入に硬く身構え抵抗してみても、それなりに内側に権力は発生するものだということも、肩で

風切っている人たちの威圧によるめきながら、おぼろげに感じていた。

というわけで、11月にストライキが解かれて授業が再開されるまでの間、大学にはたまにようすを見に行くだけでしかなかった。授業はなくてもクラス討論はたびたび（かどうかは定かでないが）行われていたらしく、暢気な元高校生は、ますます状況にとり残されていたことを後になって実感した。文学部4組というクラスは、第1語学にフランス語を履修した人が配属されていたのだが、そもそも履修登録をさぼった人たちもひとまとめにここに放りこまれていた。じつは私もその一員で、暢気という程度を越えていたかもしれない。

で何をしていたかというと、太陽の下で汗を流していたのである。C構内に2回目だか3回目だかに足を踏み入れたとき、サークルの勧誘にひっかかった。というより、探していたものが向こうから出現した思いであった。それが考古学研究会。遺跡遺物のたぐいには、小学生の頃から興味があり表面採集も行ったりもしていた。高校時代には、鹿児島県吹上町で別府大学の考古学研究室が行った、縄文期の洞窟遺跡の発掘調査に参加したことがある。土砂をかぶってばかりいたので、調査団長にがんばり屋だと思われにやめられのがその時だ。

経験があるということ、他の部員にただのひとりも紹介されない前に、早速翌日から現場に直行するよう指示された。動員された遺跡は、阪急の西向日駅のすぐ東、長岡京の朝堂院跡とい

うことであった。もっとも初日は西向日がどこかわからず、なぜか梅田まで行ってしまい、引き返すのに各駅停車に乗車したから、現地到着までに途方もない時間を要した。

名のみの存在と思われていた長岡京が、宮城・京城の発掘によって実在したことが証明されてから、当時まだそれほど時がたっていなかった。新しい発見があいついでいた時代である。ほとんど独力でその難事をなしとげた中山修一氏が現場を指導していた。中山先生は村夫子然とした風貌で、なぜか麦藁帽子のつばにクララ・シューマンと油性インクで書いてあった。昼間発掘があるので、夜間の高校に勤務しているということだった。作業にあたっていたのは大学院生らの混成部隊であったが、予期した研究会の他のメンバーはおらず、現場の終了まで結局ひとりきり。これははたしてクラブ活動といえるのかと考えこんだ。ただし発掘現場には意外に来客が多く、大学で見かけることができなかった大学の先生に、比較的気楽に接することができた。たぶん建築史のN先生であったかと思うのだが、突然「梅棹さんの文明の生態史観についてあんたはどう思う」と聞かれて往生した。ぼくにそんなこと聞かれても……。



長岡京朝堂院の発掘

発掘は愉しく、知識は増えた。聞けば日当も支給されるとのこと。弁当代とクラブへの上納分を引かれても、じゅうぶんアルバイトの賃金に匹敵した。受験勉強のあとで体を動かすのも爽快であったし、肌にランニングのあとがくつきり残るのも気にいった。一石何鳥なんだろう。

長岡京は、都の平安京への移転後、一度も都市化されることがなかったので、人の生活による後世の堆積がほとんどなく、現在の地表から数十センチも土を剥ぎ取るとたちまち遺構が現れる。何よりもそのことが感動的であった。ただし、建築に用いた素材の多くは平安京に持ち去って再利用したらしく、瓦などの出土は少ない。だから遺構は、土を搔いているうちにいつのまにかくつきりと地面に描き出される柱穴、雨落ち溝などの輪郭として、初めて目に飛び込んでくるのだ。

写真で前かがみに立っているのが私。京都新聞に掲載されたものである。日付はその年の5月13日であるから、入学から本当に間もない。下宿のお婆さんが「これお兄ちゃんか」と言って新聞を渡してくれた。以後卒業するまでに、長岡京内裏正殿、延暦寺横川中堂、岡崎の円勝寺、山科本願寺寺内町、宇多野の御堂ヶ池古墳など、京都市内や近辺の発掘に参加したが、雄姿が新聞に載ったのはこれが最後だから、私の発掘人生のピークは早々に訪れていたわけである。

炎天下の発掘も寒風に悩まされる発掘もあったが、逞しさを増してゆく自分がわかって痛快だった。ただし考古学そのものを専攻しようという意思は比較的早い段階で放棄していたように思う。いくつか理由はあるが、最大のものは、研究会の他のメンバーの知識や意識と自らをひき較べたことにある。とりわけ屹立していたU君は、下宿の机の周囲、部屋の四方に積みあげ

た専門書の山の間から顔を覗かせながらにこにこと古代の信仰と祭祀について語ってくれた。私とはとても同じ地平にいて思えなかったし、かなう相手ではないと痛感した。

そのU君（現在は文学部教授）に誘われて、授業が開始された頃から、数人の同じ学年の人たちと読書会を始めた。誰が提唱したのか最初のうちのテキストは『日本霊異記』であった。僧景戒の「神祟神怒落雷怪火となってあらはる」といったフレーズが面白く、それを唱えつつ、空いた教室をもとめて転々としながら読書会は長くつづいた。

テキストから何を讀み取ったかはまったく記憶にない。私にとって真に驚きだったのは、参加者の面々である。同じ世代にしてかくも博覧、かくも深慮、かくも緻密の人がいることに、眼を開かされる思いがした。正直授業そのものは出席を遠慮しがちだったし、成績にも興味がなかったが、こうした友人たちから得たものは量り知れない。後になって17世紀イギリスの革命動乱期に活動した「目に見えない学校」というものの存在を知ったが、私にとって大学とは、こうした友人たちとの交流・交信にほかならなかった。ひとつの出会いはずぎの出会いを誘ってネットワークは広がり、やがていくつかの濃密な関係のなかに身をおくことになる。

そんな中で、そうそういつまでも暢気ではいられないと思い、事実そう暢気でもなくなった。ここまでの流れとはまた大きく転換した個人史も以後にないではないが、そこまで進むにはこの欄は小さすぎる。残念。

（かわしま あきお）

私の学生時代

木村 崇（文化環境学系）



ソ連という、どこかおどろおどろしい国に関心を持ったのは中2の頃だったろうか。猛威を振るった小児麻痺に国内の生ワクチン生産が間にあわず、お母さんたちの運

動が実って、社会主義国ソ連からの生ワクチン輸入が実現した。当時北海道のまん中にある旭川という地方小都市で少年になっていた私は、届いたワクチンがどれもいびつな形をしていたという新聞記事に、曰く言いがたい興奮をおぼえた。やはり形は効能に関係なく、その後罹病者は激減した。これを社会主義が「すぐれていることの証明だ」という人と、それでも社会主義は「とんでもないものだ」という人がいた。

北海道には樺太からの引き揚げ者が大勢移り住んでいたし、シベリア抑留から戻った人たちもいた。その人たちのソ連に対する見方があまりにもバラバラなので、かえって興味をそそられた。そこでソ連大使館に手紙を書いて、ソ連に留学する方法はあるか問い合わせしてみた。すぐに返事が来た。高等教育を受けるのが困難な発展途上国の青年に対して往復の旅費、防寒衣料購入一時金、宿舍、十分な奨学金などの保障された「民族友好大学」が1960年からモスクワに開設され、「先進国」の日本からも学生の特別採用枠があるから受験してみなさいという助言を得たのであった。

それから5年後、私は「パトリス・ルムンバ

記念民族友好大学歴史・文学部」の予科生となってモスクワにいた。1963年9月のことである。同じ年の4月に東北大学文学部に入学したのだけれど、ごく少数の講義を除けば、刺激的なものは何もなかった。18歳の私は躊躇せず人生行路をソ連留学へと切り替えた。「ロシア屋」としてその後今日まで飯を食ってこられたのは、あのときの乾坤一擲のおかげである。

ソ連の大学在学年限は一般には5年だが、友好大には軍事教練がなく、社会主義理論に関連する科目は完全選択制だったので、医学部以外は4年で卒業できるようになっていた。予科の1年間はもっぱらロシア語をマスターするための期間である。大学は全寮制で、ロシア人をはじめとしてソ連のさまざまな民族出身の学生が半数と、私たちのような留学生が半数、文字通り同じ釜の飯を食べて暮らしていた。

1963年初冬の深夜にその事件は起きた。廊下が急に騒がしくなった。何事かと起き出して廊下に出てみると、アフリカやらラテンアメリカの学生たちが狂喜乱舞している。一方ソ連の学生たちはというと、全員が悲しそうにうなだれ、中には泣いているものもいる。J.F.ケネディ大統領暗殺のニュースをBBCが伝えたためだった。平和共存期とはいえ、ソ連には報道の自由はなかったから、世界情報は外国からのラジオ放送に頼るしかなかった。それでも私は毎日ぼうだいな量の宿題をこなすのに精一杯で、深夜放送は聞いていなかった。このときは事態を飲み込むのに多少時間を要したとおぼえてい

る。

半世紀前ソ連が開発した大陸間弾道弾は世界の人々を震撼させた。アメリカは対抗してもっと性能の優れた核ミサイルを開発しはじめ、止めどのない軍拡競争がはじまった。「冷たい戦争」の最中、全人類を滅ぼしかねない「キューバ危機」が勃発し、世界中が固唾を飲んで事態の推移に注目した。ぎりぎりのところでソ連共産党の最高権力者N.フルシヨフ第一書記長が、キューバへ運び込みアメリカを狙って設置されたソ連のミサイル群の撤退を命じ、ケネディーがそれを冷静に見届けたために、一触即発の危機は回避されたのであった。この時ソ連の人びとにケネディーへの期待と信頼がいきなり高まったらしい。おそらく地上でソ連人ほど「絶滅の危機」を感じ取っていた人びとはいなかった。その時点からわずか20年前の大戦では、民間人をあわせて3000万人の犠牲者を出した人たちである。その実感は平和慣れした私たちの想像をこえるものであったろう。



学生証

翌64年の8月、私はモルダヴィア（現在はモルドヴァ共和国）のkolhozでトマト取りをしていた。7月は、黒海をはさんで対岸にある有名なリゾート地、ソチの近くで遊びほおけ、2カ月分の奨学金の大半を使い果たした。9月まで「生き延びる」には、旅費・滞在費を含め

30ルーブルを払い込めば、1日わずか3時間の労働で3食を保障してくれるという、ありがたい場所がそのkolhozだったのだ。

モルダヴィアは有名なワインの産地なので、ブドウの収穫をさせると期待していた（夢見ていたのはもちろん、「盗み食いのし放題」である）。残念ながらブドウはまだ熟れてはいなかったし、プラムもまだ樹木にしがみついたままで、いくら揺すっても落ちてはこない。作業はなんと、地べたを這うように植え付けられたトマトの赤く熟したのだけを大小をとわず全部もぎ取って箱詰することだった。ノルマは1日10箱。ところが、どんなにがんばっても私にはせいぜい1日7箱しかこなせない。小さなトマトは、遠慮なく大きなものの隙間に入ってしまうからだ。ソ連の学生たちは2時間もかからずにノルマを達成して遊びに行ってしまう。見ると、彼らはでかいのだけを選んで箱に入れていた。日本人の誇りと良心にかけてそんな「不正」はどうしてもできなかった。不思議なことに、そんな私が最後には「社会主義労働英雄」として表彰された。ソ連人学生や他の国々からの留学生たちは、毎日の収穫量にムラが大きすぎて、総量では私に遅れをとったのだ。

8月6日、唯一の日本人だからということで、「ヒロシマの日」の集会で話をしてくれと頼まれた。ロシア語学習をはじめてから1年にも満たないので自信はなかったが、テキストを作って読み上げればよいと言われて、引き受けてしまった。何を話したかよくはおぼえていないが、ヤルタ会談で、ナチス・ドイツ降伏の3カ月後ソ連は対日参戦をすると約束されていたため、アメリカは広島に次いで「約束の日」の8月9日、長崎への原爆投下を強行し、すでにはじまっていた冷戦下での戦後処理における主導権を握ろうとしたのだ、という説を紹介したと思う。

そして締めくくりに、ベトナム戦争でアメリカは間違いなく北ベトナムへの爆撃をやるだろうし、そうなれば、ヒロシマ・ナガサキの悲劇を繰り返すことになる、付け加えた。

この「余計な締めくくり」が大学当局のその筋の神経を逆撫でしたらしい。翌日私と並んで小用を足していた副学長が、「キムラ、君が政治的に優れた反ソ分子であるということはよく分かった。しかし私も政治闘争では経験豊かな人間だ。覚悟しておきたまえ」と凄んだのである。ソ連では「副」という肩書きの人間はKGB関係者である。「いや、僕は根っからの親ソ派人間ですよ」とこたえたが、彼は薄笑いを浮かべて先に「便器」(申し訳程度の代物なのでカッコに入れる)を離れた。「北爆」が始まったのはそのすぐ後だった。ラテンアメリカや中近東出身の大勢の留学生たちが私の所へやってきて、「おまえの予告通りだった」と褒めてくれた。フルシヨフの「平和共存」路線の破綻はもやは誰の目にも明らかになった。

その年の秋も深まったある日、フルシヨフが「健康上の理由により年金生活に入る」という朝のニュースを聞き、私たち留学生はいっせいに本屋に走った。しかし、あれほど山積みになっていたフルシヨフ「全集」も、でかい肖像のポスターも、跡形もなく消えていた。手分けしてモスクワ中をかけずり回ったが、一夜にしてフルシヨフ関連グッズは完全に処分されてしまった。こうしてそれから20年近くたって訪れたペレストロイカ期に、「停滞時代」と命名されることになるブレジネフ時代が始まったのである。

1968年の秋、私は5年間の留学を終えて故郷の旭川に帰っていた。友好大卒という学歴を認めてくれる企業は少なく、大学院にでも入るしかないかなと、漠然と考えていた。ソ連軍がプラハに侵入し、「プラハの春」という「人間の顔をした社会主義」は、あっさり潰されてしまった。私の「社会主義を知ってやろう」という旅は、このとき終わったと思う。

(きむら たかし)



卒業証書

統計学事始の頃

長屋 政勝（国際文明学系）



学生時代の思い出をということであるが、なにせ今から40年以上も前のことなので、しかとした記述になるかは心もとない。ともあれ、私が経済学と統計学へ向うこと

になった経緯なりを語ってみることにする。

1962（昭和37）年4月、北大教養部文類入学。当時は日本経済の高度成長始動期、それを物的技術的に支える人材育成ということで理工科ブーム、成績優秀な学生ほど理系それも工学部を志向するという風潮が強く、とにかく文科系学部やその学生は肩身の狭い思いをさせられた時代でもある。そんな中、歴史が好きで大学では史学専攻をと考えていた。社会的には60年安保闘争の余燼も冷め、寮やサークルでは闘争の生残り組が眼に暗い影を宿してなにかを伝えようとはしていたが、その影響力はすでに失われていた。日本社会が舵を大きく右に旋回させた時期であった。大学管理法案や核実験反対などでクラス討論や学内集会、市内デモなどはあったものの、それとてかつての学生運動のような高揚をみせることもなく散発的であり、幸か不幸か総じて平穏無事な学生時代ではあった。従い、みな貧乏ではあったが落ち着いて勉強できた分、そこそこ良い時代環境にあったとは思われる。しかし、なぜか社会科学の研究や勉強には激動期こそ適しているみたいで、安穩で生ぬるい社会状況はとりわけ経済学には似合わない

いようだ。これまでの日本で、最も真摯かつ秀れた若者が他ではなく経済学の研究を志して大学に集まったのは大正末から昭和初期、そして昭和20-30年代前半の2度しかないというのが私見であるが、これらはいずれもわが国社会経済のかかえる矛盾が露呈し社会運動の最も激化した時期でもあった。

教養課程は2年間、それを終える半年前に文科系4学部のひとつを選択しなくてはならない。その頃には歴史から経済に関心が移っており、文学部の史学科と哲学科に幾分の未練はあったものの経済学部に進んだ。その動機は歴史と社会のあり様をめぐるさまざまなこれまでの考え方を自分なりに模索してゆく中で、人間生活の骨組みは昔も今も生産過程における人間関係によって規定されており、社会生活の基盤は経済構造によって枠組みされているのではないかと。畢竟、人は頭で考えるというのが実はその考え方や中身、またそこから出てくる行動様式は胃腑の具合によるのではないかと、こうした点に遅ればせながら気づいたことによる。誠にもって迂闊なことではある。そうした考えを後押ししてくれたのは、教養部生にも参加が許されていた経済学部の院生と学部生の「資本論研究会」である。この研究会の中から社会思想や経済思想・理論の流れや特徴を自分なりに勉強するやり方を掴めたみたいだ。『ドイツ・イデオロギー』と『経済学批判』は『資本論』へ進攻するための橋頭堡となった。また経済学説史をたどる中で、ケインズ『一般理論』をまわりの多くが新

古典派の純理論として読んでいるのに疑問を感じ、1930年代イギリス経済の閉塞状況を打開するための理論的格闘からの産物であり、一般ではなく特殊個別理論として社会思想の流れの中で理解することが必要であるといった主旨の生意気なレポートを書いたりなどもした。

経済学部を選んだもうひとつの理由（あるいはこの方がより大きなインパクトをもっていたかもしれないが）は、サークルや先の研究会の先輩たちからひとりの非常に個性的な先生存在を伝聞しており、そのゼミナールへ是非参加したいという想いがあったからである。現在でもそうであろうが、経済学部というところでは2年間どの先生の演習で修養するかが決定的な重みをもつ。私の恩師に当たるその内海庫一郎（1912-1994年）という方は小原国芳時代の成城学園の出身、京大では蛭川虎三の下で学ばれた人物であるが、とにかくその考え方や生き方、博覧強記と洞察力は常人の物指しでは測りえないスケールの持ち主であった。その教えはそれまでの生意気で生半可な私の態度や考え方を木っ端微塵に打ち砕いた。しかも、その方はなんと統計学講座の教授であった。経済原論か経済思想・学説史とは考えていたが、まさか統計学をやろうなどと思って経済学部を選んだわけでもない私が、いまなお統計学を勉強している（せざるをえない）所以ではある。

学部3年次はゼミナリストと一緒に恐慌論研究をテーマとした。恐慌などといういまの学生諸君には珍奇に聞こえるかもしれないが、これはいまもって経済学研究の最重要課題のひとつであると私は考えている。1960年代後半以降、日本の社会経済は高度資本蓄積の中で諸矛盾をさらに激化させていくのか、それとも資本主義経済の枠内でなお一層の発展が可能なのか。とすると、それは資本主義の最高発展段階

としてのいわゆる帝国主義とどう違い、それをどう変質させたものなのか。こうした点をめぐって「国家独占資本主義論争」とよばれる白熱した議論があった。そうした中から政治レベルでも、また社会思想や経済理論でも（世界的流れの中で）「構造改革論」が登場し、かつてのような経済理論の現実社会経済への硬直した適用の限界、それへの批判が言われだした。では、本当に恐慌や社会の構造的崩壊の危機は消失したのか、生産力の高度化だけに依拠したスムーズな社会進化が可能なのか、可能とすれば恐慌論は19世紀の遺物に終わってしまうのではないか、これらを検討するというものであった。ゼミ共同で昭和初頭の経済恐慌（＝昭和恐慌）を事例に選びその実証研究を手がけるとともに、私自身はもう一度原点に戻って勉強する必要を感じとり、再生産論や恐慌論の基礎研究に埋没することになった。経済学の難しさと面白さを私なりに学びえたと思う。山田盛太郎『再生産過程表式分析序論』を苦勞して古書店で入手し、よく理解しえたか否かは別にして、それを読み終えた時の感慨はいまも残っている。ただ、恐慌（無政府的過剰生産）を金融・信用（血液循環）問題と切り離し、再生産論（骨格）レベルだけで分析することの限界には理解が及ばなかった。

4年次は計量経済学批判がテーマであった。高度成長を背景にして新古典派の最新の理論的武器として計量経済学的モデル分析が隆盛しだし、経済計画や政策立案 シミュレーションや予測に有効性を発揮できると喧伝された。そうした経済現象の数理モデル化（＝連立方程式化）、力学・物理学還元志向、数学・確率論援用が真に経済学研究の前進になるのかを問題にした。ちょうどその折、内海先生の共同研究者でもあった岩崎允胤氏の『現代社会科学方法論の批

判』が発刊され、科学方法論から計量モデル分析を批判的に検討する見地を提供してくれた。これをまとめて、年1回秋に開催されていた全国の経済学部生の研究討論集会「インターゼミナール」に参加すべく、札幌から夜行列車で一昼夜かけて上京し、他大学の参加ゼミを相手に青臭い議論を吐いた思いもなつかしい。

卒業後は大学院進学をと考えていたので就職活動とは無縁であったが、院入試は通ったものの本当になにを固有の研究主題にすべきか、まったく暗中模索の状態ではあった。とはいえ大学院ではいやおうなしに統計学に縛られざるをえない。統計学研究を視野に入れて、学部時代の最後は蜷川統計理論（これは『統計利用の基本問題』、『統計学概論』、『統計学研究』の3著に集約されている）との格闘に終わった。蜷川理論とはそれまでの輸入学問であった統計学を、その対象と方法の点で統計利用者の立場から徹底的吟味にかけ、社会的集団（＝大量）に対する組織的観察様式（＝統計調査と統計利用）の特質を究明する「方法論」と規定し、わが国の統計学の脚を初めて地に着かせ、社会科学のレベルで自立させた理論といえるものである。しかし正直いって、とくに『概論』で示された蜷川理論の大量から統計的法則への「体系」偏重の理論構成にはついてゆけなかった。蜷川理論批判を込めた内海先生の学位論文「科学方法論の一般的規定からみた社会統計方法論の基本的諸問題」を研究室の先輩から頂き読み込むうちに、現実の実証研究に対応した統計調査ととくに統計利用の方法様式にはいまだなお未解決な部分が多くあることが分かり、このうちのどれが自分に適した研究題目なのかなどを考えたりしているうちに卒業を迎えることになった。卒業論文はなかったが、ゼミの卒業レポートとして「科学方法論と認識論の関連について

の一考察」をまとめることにした。これは戸坂潤の『科学論』と『科学方法論』、さらに見田石介『資本論の方法』などを参考にして、『経済学批判』の「序言」にある研究の「導きの糸」としての方法、同じく「序説」にある分析・綜合様式としての方法、この2つの方法の関連をとりあげ、経済学の研究方法論について自分なりに検討したものである。とはいえ、いまみると恥ずかしくてとても人様に見せられるような代物ではない。

これからの大学はいい意味での「聖域」であることは難しくなっていくだろう。法人化に伴い、競争原理や成果主義を導入して研究を活性化するなどという野蛮な風潮が以前にもましてはびこりだした。馬の鼻先にニンジンといったやり方で本当に研究や教育が充実していくのか、まったくもって疑問である。戦前の大学のあり方の反省の上に立って、先達が築き護ってきた大学の自治と研究・教育の自由が崩壊しようとしている。アカデミーの精神的風土の荒廃はまずまちがいなく進んでいくであろう。そうした厳しい環境の中、どうか学生諸君にあっても、「勝ち組」などと称して京大に入ったことだけで自足することなく、徹底的な自己反省と批判精神を忘れることなく、日本の社会構造とその歴史的段階を冷静に分析し問題の所在を的確に把握できる智力を身につけて欲しいと思う。

（ながや まさかつ）

学生時代の思い出

西井 正弘（国際文明学系）



最近、大学生の中にも、自分のことを「生徒」と呼ぶ者がいる。私達の世代の者は、小学生は「児童」で、中学・高校生は「生徒」、大学になると「学生」と言うのだと教えられてきた。大学生は、児童・生徒とは異なり、教えられる対象ではなく、自ら「学ぶ」ものだという意味で学生と呼ばれる。今や大学生は、学生ではなく生徒なのか。

「今時の学生は……」という口調は、何時の時代にもみられる教師の習性だと何かで読んだ記憶がある。私も、大学で教え始めていつの間にか30年目に入ってしまった。学生諸君への期待は、「ぼやき」と受け止められ、インターネット上に「あの口調はやめて欲しい」と書かれ、はっと気付くこの頃である。気持ちは若いつもりであるが、何時の頃からか学生の両親の年齢は私の歳よりも下になっている。

『総合人間学部広報』に「学生時代の思い出」を書いて、自ら昔を懐かしむことも、老化の現れなのかも知れない。今の学生諸君に伝えるべき前向きな話を書き記してみようと思う。

そもそも私の「学生時代」とは、いつの時期のことなのだろう。大学院法学研究科でも5年間学んだので、京都大学法学部在学4年間と合わせると、1965（昭和40）年から1974（昭和49）年までの9年間は学生時代といえる。ちょうど日本の高度経済成長期から1973年の第4

次中東戦争による「石油ショック」とその後の物価高騰期までが、それにあたる。大学院でも優れた先生方や院生の仲間と出会うことができたが、ここでは学部時代の人との出会いに絞って、記してみたい。

1965年4月、京都大学法学部に入学した私は、親元を初めて離れて「下宿」した。今のような「学生向けワンルーム・マンション」は存在せず、大学近辺の住宅で、離れや二階を貸す下宿が一般的であった。大学生生活2年目以降最後までお借りした聖護院の下宿も、部屋のみで外食であった。「下宿のおばさん」は、今の私の年齢よりずっと若かったと思うが、学生時代に会話した最初の大人であった。

教養部（現吉田南構内にあった2年間の一般教育・外国語教育・保健体育等の教育組織）での授業は、大学生になって受けた最初の講義であった。フランス帰りの大橋保夫先生のフランス語の発音の素晴らしさに、フランスへの憧れを感じたものである。もっとも記憶に残っている1回生時の講義は、大隅健一郎先生の「法学」の講義である。吉田南4号館（当時はE号館）の大教室で、具体的な事件・判例の説明を通じて、法学の基本的な概念を明らかにされた。この授業のスタイルが、1988年に、西村健一郎・初宿正典両教授と企画・出版した『判例法学』（有斐閣）に活かされている（同書の最新版は、第4版、2005年）。社会経験の少ない学生に複雑な法論理を理解させる手段として、判例に着目した優れた授業であった。



1966年7月（助日本国際問題研究所主催夏期ゼミナール「変貌する国連」（場所：岡山市「岡山県児童会館」）（恩師：田畑茂二郎先生との初めての出会い）（筆者：2回生）

3回生前期には、法学部の太寿堂鼎先生の予備ゼミを受講した。毎週 New York Times の Weekly 版から、報告担当者は国際関係の記事を選び、その記事の背景や当該国家の歴史などを調べて報告し、みんなで議論する形式のものであった。当時読んでいた日本の新聞が、中国の文化大革命を礼賛する内容のもので、国際面の記事に深みのないものであったのに対して、個々の記事自体が問題の原因にまで踏み込んでおり、職業としてのジャーナリストに憧れをもったのは、この授業を通してであった。先生の海外出張中に、第3次中東戦争（1967年6月）が起こり、学生だけで自主的に勉強会を組織して、中東問題の総合的研究を目指し、夏休みに文集を作成した。今読み直してみると、歴史・宗教・民族・国際関係・国際法など、既存の論文や本の要約や紹介にとどまり、とても「論文」と呼べるものとはいえないが、物事を全体として理解しようと努力したことは、意味のある作業ではなかっただろうか。

3回生後期から1年間の「演習」として、田畑茂二郎先生の「国際法」と猪木正道先生の「日本政治外交史」の2つを受講した。前者は、22名参加という大人数の演習であり、前期・後期各自1回ずつの報告で終わった。2回生の夏、

学外セミナーで個人的にお話をする機会を持つことができた田畑先生には、その後大学院でもご指導いただき、研究者の道に進む切っ掛けを作っていただいた。猪木先生は、演習や講義の中で、ご自分の学生時代や恩師河合栄治郎のことなど、よく話してくださった。忘れられない思い出は、4回生になって、企業への就職か、国家公務員か、大学院かと私自身が進路に迷ったときに頂戴した助言である。「多くの学生は、自分が就職する時点での花形産業を希望するが、30年後もその企業が活力を維持しているか疑わしい。」物事を決める際には、長期的な視野に立って判断すべきだという内容だったと思う。自分が選択した大学教員の途が、果たして良かったのか、あるいは適していたかは、現役を離れるときに結論が出るのかも知れない。



1968年12月10日「政治思想研究会記念撮影」（前列左から2人目が高坂正堯先生）（コメント：約1ヶ月後に「大学紛争」が起こり、時計台も占拠される）

最後に忘れられないのが、4回生の4月から11月まで、近衛通りの「楽友会館」の会議室

で実施した自主ゼミ「政治思想研究会」に毎回参加いただいた、高坂正堯先生のことである。当時、法学部助教授であり、国際政治学の講義は担当されていたが、「演習」をお持ちでなかった先生は、今から考えてみると大変ご多忙な中で、学生達の勉強会に欠かさず出席下さり、『ガリバー旅行記』の読み方や、国際政治の捉え方を話され、「目から鱗が落ちる」という想いを何度も経験した。淡路島・洲本まで打ち上げの船旅をご一緒したことも懐かしく思い起こされる。

うに思う。今の学生諸君も、きっと夢や希望を持っていることと思う。大学での人との出会いは、一生涯続きうる友情の始まりであるし、読んだ本は人生に影響を持つものだ。先生であれ、友人であれ、学問であれ、何かと出会うことを期待して学生生活を前向きに過ごして欲しいと願っている。

(にしい まさひろ)



教養部正門前（門柱に「造反有理」の落書き）



時計台前（窓ガラスが割れている）

当時は、ベトナム戦争の真っ最中でありその影響が大きく、また日本の社会全体もそれほど裕福とは思えなかった時代であった。ただ、若者は、まだ貧しくとも将来に夢を持っていたよ

あなた方ご自身の思い出を

服部 文昭（認知情報学系）



「学生時代の思い出」
＝「恥ずかしい思い出」
ですから、思わず「歴史
は《いま・ここ・私》に
向かってはいないぞ」と
叫び出したくらいです。
楽しい思い出、すばらし

い思い出と言えるものも無いことはありませんが、それこそ自分だけのものとして、他の人には教えたくありません。「思い出」というものは、何かしら共通の背景を持っていなければ、伝えることも不可能です。むしろ、受け取る側からは、鼻持ちならない自慢話にしか感じられない場合も多いでしょう。そのような訳で以下の文は、現在とは直接に結びつかない、30年余りも大昔の或る学生の《いま・ここ・私》の、しかも取って置きではない日常の断片であることをお断りしておきます。

尚古趣味のせいか、入学時には万葉集か考古学を専門にやろうと思っていましたが、S先生との偶然の出会いから違う道を進むようになりました。自宅から駒場まで、1時間15分ほどで、ごくありふれたグータラ自宅学生でした。ちなみに、この学生は、坪内逍遙の『当世書生気質』の舞台にもなった王子権現の近くで生まれ小学生の時に埼玉県に転校した、典型的な「埼玉都民」です。

そんな学生時代に、専門とは何ら関係しなくても強い印象を受けた先生が有りました。そのお一人、人文地理学のO先生は、私が初めて

個人的にお話した「大学の先生」で、図書館4階の視聴覚室で大変明快な講義をされました。大学で初めて覚えたドイツ語の言葉が、最初のころスライドでいつも説明された、ファッハヴェルクという単語です。ゲストスピーカーの見える時もあり、『アフガニスタンの農村から』を出されて間もなかった大野盛雄さんが来られたこともあります。彼の地をどのような過酷な運命が待ち受けているか、その時には全く分かりませんでした。

新入生気分はまだ抜けないある午後、井の頭線のホームでばったりお会いすると、これから本郷で研究会があるから、良かったら一緒に来ませんかとお言葉。いつも教室の一番前に座る癖があったので私の顔を御存知なのか、などとドギマギしつつも、先生について銀座線、丸の内線と乗り換え（その後数え切れないほど通った道の最初でした）、本郷に行きます。その日は、（今は中央大学教授の）Mさんが、たしか、ペドウィンのフィールドワークから最近帰国されたとかで、その報告会でした。今にして思えば、えらく場違いな気もしますが、一年生になりたての私を気さくに誘ってくださったO先生のお人柄を改めて思い出します。

博識の先生の講義で紹介される本も、たとえば室鳩巢の『駿台雑話』からサイバネティックスの本まで多岐にわたり、面白いものでした。中でも印象に残っている一冊があります。それは、George Perkins Marshの*Man and Nature*という本でした。O先生のお話では、本郷の附

属図書館に大震災後に寄贈された一群の図書があり、その中に、エドワード・モースの家族から寄付された、モースの蔵書であった一本があるとのことでした。そこで早速本郷に行き、書庫から出してもらおうと、ぼろぼろの皮の表紙の大きな本が目の前に差し出されました。その時の感動、興奮は今でも覚えています。



たまには勉強も。

専門と無関係の先生との交流では、N先生もそうです。必修単位とはまったく関係もなく先生の体育の授業やゼミに潜り込んで、実際のエアロビクス・トレーニング（ランニングしては脈を測り、ダンベルを持っては脈を測りといったものでしたが）に参加したり、英語の論文の輪読に加わったりしていました。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を読んだのもその時だったと思います。

専門の先生とは？と訊かれそうですが、私が全く不勉強だったせいで、勉強の思い出がありません。本当に、大変に良い先生に恵まれたのですけれど…。この道を選んだきっかけはS先生なのですが、先生に関しては、その学問をきちんと受け継ぎ世界的にも優れた研究者になられた方が私の身近に複数いらっしゃいますので（三谷恵子先生もそのお一人です）、そのような方たちにこそS先生を語る資格があり、

私なぞが贅言を費やすべきではありません。しかし、多くの方が不思議な目で見るとあのロシア文字一つ一つの書き方から親しく手ほどきを受けた身であれば、もちろん、先生への思いは深いものがあります。

ある時、もともと二人ほどの演習でしたが、その日は私一人とS先生の、まさにマンツーマンの授業となった日がありました。駒場の図書館4階の小演習室（8人も入れないくらいの狭いもの）でしたが、寒い雪の日でした。窓から雪を眺め、定期的に聞こえてくる井の頭線の電車の音に耳を傾けていると、次第に先生の声が遠くなり、目の前のセルビア語の文字が何だか訳のわからない模様に見え始め、気が遠くなってゆきました。

私の専門分野の無双の大権威で指導教官をお引き受けいただいたJ先生（後にお仲人までしていただきましたが）は、いつも4時を回ると「服部君、今日はどうだろう？」とおっしゃいます。翻訳すれば、「今日の幕内上位の取り組みは、どれが面白いと思うか？また、下位でも、面白い取り組みが有ると思えば、それを指摘せよ」という具合です。上位の取り組みの時間ならば、たいていのお店が開いています。しかし、下位の時間では、気の利いた店はまだ準備中です。そこで、先生は、私が御案内する、横丁の奥の学生相手の粗末な店で、テレビ機に陣取っての観戦となるわけです。また、世界的な印欧語学者のK先生も、「服部君、今日は、2本は出るよね？」とおっしゃいます。「ええ、向こうはローテーションの谷間ですし。」これは、当時の王選手が世界記録に近づきつつあった頃のことでした。今の若い皆さんにも、是非、国技の相撲に、また、正岡子規以来の日本人の心のスポーツである野球に、もっと親しんで欲しいと思います。もちろん、私は、サッカーも

好きですけど。なにしろ母校浦和高校サッカー部は、かつて69連勝した記録を持つのですから。ちなみに、この連勝記録を止めたのは、あの蕨崎高校です。



いつも楽しく！

こんな風に、J先生に対してもS先生に対しても、ただただ、恥ずかしながら私の不勉強から、その学恩に全く報いることが出来ないでいるという結論になる訳です。ですから、今、この駄文を読んでいるあなたたち、こんなものはすぐにリサイクルボックスに入れてしまって、あなたたち自身の思い出を作ってください。その際に、一つだけお節介な口出しを。私の父は、今風に申せば、私がまだフリーター時代に、還暦もそこそこで旅立ってしまいましたが、大変な映画好きでした。そこで（私の学生の頃の父の年齢となった）私に、皆さんの思い出作りのために4本の映画を推薦させてください。

1本目は、『グッド・ウィル・ハンティング』です。評判になった映画なので既にご覧になった方も多いでしょう。説明も要らないですが、私はいつも、ランボー教授の視点からこの作品を見てしまいます。2本目は、数学の教授つながりで、バーブラ・ストライサンド監督・主演の『マンハッタン・ラブソディ』(The Mirror has Two Faces) です。3、4本目は、「教える」、

「学ぶ」ということを考えさせてくれる映画です。まずは、ダニー・デヴィート主演、監督はペニー・マーシャルの『勇気あるもの』(Renaissance Man)。最後に、マイケル・ウィンターボトム監督の『日蔭のふたり』(Jude)。いわゆる文芸映画で、原作は原作、映画は映画と考えて下さればよいと思います。ケイト・ウィンスレットは、誰が何と言おうと明らかなミスキャストですが、映画は立派に出来ているので、是非、ご覧になってください。では、どうか、楽しい学生生活を！

(はっとり ふみあき)

雑感—京大出身者として、教員として—

カール・ベッカー（人間科学系）



小生は31年ほど前に大学院生として来日した。来日前に京大文学部の教授と予め相談したところ、日本語が不十分と指摘され、暫く天理大学で日本語を勉強することになった。その後、京大の宗教学科の大学院に入学した。この度、「30年前の京大の思い出を語るように」という依頼を本誌の編集部より受けたが、自分の頭に浮かぶことばかりを書き並べ、読者のことを考えないのは京都らしくないだろう。読み手が紛争時代以前の年輩で、小生同様に当時の京大を懐かしく思い出す文学少年ならば、赤ヘル・椅子と机のバリケード・時計台の落書き、懐かしい名物教員のうわさ話、著名な先輩の名前を挙げた話で良いのかも知れない。あるいは、当時の京大宗教学と現在の宗教学や、小生が若い頃に学んだ学問と現在の学生に教えている学問を比較しても面白いかも知れない。し

かし、本誌の読者のことを考えると、安保、いちご白書、長尾雅人、梶山雄一、武内義模、などの昔話を述べても、筆者と読者の隔たりを感じさせるだけで終わってしまうだろう。「僕らの名前を覚えて欲しい」と歌ってもピンとこず、「なんやねん?」と言われそうである。今の京大生にとって、多少とも役立つようなことを、小生の大学院生時代の思い出から抽出できればと思う。小生が京大の大学院に入った時、既にアメリカやカナダ、ハワイやインドの大学を経験しており、大学院や研究に対しての固定観念を持っていた。日本の高校生も、大学に入学する際、自分なりの期待を持っているだろう。京大はそのような期待から大幅に外れる場合が多い。しかし、その格差にショックを受けて時間を無為に過ごすのではなく、むしろ格差を早く理解し、京大の利点を見出すことによって、学生生活を有意義なものにできるようにすべきであろう。

英米の大学および大学院で期待されているのは、教科書通りの大系を暗記することではなく、その知識を前提とし、大系を解体し、批判し、その弁証法的学問的過程から仮説を想定・検証し、新たな大系を企てることである。他方、日本の高校までの教育は、既に「出来上がっている」知識体系を「教科書通りに」覚えることが主流で、京大の教育ではいきなり詳細な個別研究が紹介される傾向にある。確かに、テキストの講読は、それぞれの学問において不可欠な基礎をなす作業である。例えば、仏教学では教行



天理大学修了式にて（1976年）

信証、梵語の授業では世親の唯識二十論、社会学ではコント、哲学ではカントを読むことは必須である。しかしながら、欧米と異なり、それぞれの大系を紹介し、テキストを大系の中に位置付けることを目指していなかったのである。その結果、古典的なテキスト、そのテキストが発表されて今日に至るまでの解釈・解説など（学説史）を抜きに、論じられることがしばしば起こった。とはいえ、西欧式のやり方が万能である訳でもない。特に、アメリカでは批評が重視される余り、本物のテキストの講読が蔑ろにされ、表面的知識や現代的評論に終わってしまう場合もあるからである。では、小生が京大に入った時に他の学生がこのような課題をどのように克服しようとしていたのかというと、主に、自力で学説史を学び、批判力を培っていたようである。京大が土台にしていた仏独の大系の構造、歴史、学者や書物の位置付などを知らなかった小生は、それらを独自に学んだ先輩から入門書を紹介してもらったり、色々と助言をもらったりし、体系的な理解の習得に努めた。



京大院生時代吉田山にて（1977年）

教授法や授業形式も京大以前の教育機関で経験したものと異なっていた。アメリカの大学院では、優等生は前の列に座り、適宜に質問することが期待されていた。それに対して、京大では、教室の前列に座る者はおらず、質問は学生同士が授業外でするもので、先生に向かって質問することは稀であった。小生が生意気に質問をすると、先輩に笑われたり、忠告を受けたりするのが落ちであった。京大文学部の先生も初心者である学生の関心をあえて起こそうとはせず、「ついて来たい者はついて来い」という感が強かった。なるほど、一流の学者は、何もエンターテイナーにならなくてもよいのだと思った反面、一方的で難解な講義よりも教員とのコミュニケーションを欲しく思った時もあった。無論楽しい授業もあった。長谷ゼミでウィットに笑うこともあったし、清水先生の授業では、仏教美術のスライドショーの後、埃塗れになりながら、寺院の仏像や仏壇の裏側を懐中電灯で照らしながら見学したこともあった。当然ながら、語学的なハンディもあり、入学初期の頃、小生には先生が期待するほどの小論文は書けなかった。自分の下書きを先輩に読んで頂き、細かく批判してもらったお陰で、少しずつ大学院で期待された論文の書き方を学ぶことができた。

先輩による「躰」も厳しく、現在でもためになっている。小生が初めて研究室でお茶を入れようとした時に順序やタイミングを間違っしまい、先輩が小生の入れたお茶と茶葉を全て捨て、初めから入れ直したことを今でも鮮明に覚えている。廊下で通りがかった時の挨拶の仕方や、教員室の出入りの作法等、実に色々なことを教わった。当時、TAやRA等の制度はなかったが、指導教員から無報酬で生協へのお使いや図書館での下調べを頼まれ、我々院生は誇らしく思ったものである。また時々先輩や教員の自

宅にまで呼ばれ、夜更かしして議論したことも貴重な体験であった。考えてみれば、学生は皆大学を数年で離れる。卒業後、懐かしく母校を訪ねても、知っている学生はもはやおらず、学生時代、親しく教えてくれた教員だけが残っていて教鞭を執り続けている。だから、在学中に教員によく覚えてもらうことが、長い目でみると、推薦状などを書いてもらうという表面的な利益だけではなく、人間同士の付き合いとしても意味のあることだと思う。

アメリカの大学の多くは、高校の延長線上にあり、毎日の授業、出席、宿題、予習などによって、厳密に成績をつける。現在、日本の大学でも、社会の期待と学生の質に応じて、その傾向が強まりつつある。しかし京大には、点数を稼ぐガリ勉より、幅と奥行きのある知識人を目指す学生が多かった。京大、特に大学院生は、出席や点数を気にしなかった代わりに、一人一人の学生が自分の研究課題をしっかりと持ち、その検証に励んでいたように覚えている。それは本物の学問の在り方なのかも知れない。確かに、20年以上も時が経過した今では、当時の授業の詳細は殆ど思い出せない。しかし当時の研究課題や人生に対する姿勢、そこで得た友情や人脈、そして学問的な驚きは、未だに大切にしているし、何よりも貴重であると感じている。無論、授業に出席するからには、それなりの真剣さが必要だし、予習や成績も目指して欲しい。しかし、十年先に今の大学生活をどう思い出せるだろうかと、前もって考えておけば、自分の研究課題をより適切に把握し、今の時間を一層有意義なものにできると思われる。

かつての京大の教授の記憶力と知識の豊富さには、度々驚いたものである。70年代の欧米では、既に TELNET 経由の OCLC, CARL, MEDLINE 等の検索エンジン、そして冊子体の



京大 ESS 合宿（1977 年）

SCI や SSCI をはじめとする検索ツールが研究に不可欠な道具となっていた。21 世紀の今日では、日本でもそのような検索方法は普及しつつあるが、当時、京大の図書館は「情報提供」や「研究支援」というより、「博物館的な物品管理機関」という趣きが強く、文系の検索ツールは甚だ頼りない不完全なものであった。その代わり、教授自身が驚異的なほど、自分の専門の文献、さらにはその内容までも暗記していた。データベース検索が出来ない代わりに、「生きた検索エンジン兼百科事典」であった教授に相談をすれば、次々と関連文献を紹介してくれたことに、恐れ入ったものである。ある時、「武内先生も退職されるし、いつかは亡くなる」と思った瞬間、恐ろしくなったことがある。なぜならば、その大家の死と同時に、膨大な知識と情報もこの世から消え去ってしまうと感じたからである。

30 年前の文学部の教員は実に優雅な文人に見えた。週に二度ばかり京大に来られ、2・3 コマの授業を教え、残りの時間を研究や執筆活動に注げば良かった。授業期間は、ゴールデン

ウィークや国鉄のストが終わった5月から6月、そして学会や学園祭を除く10月から12月という程度で、休講も多かった。そのような「研究者生活」に憧れた文学青年は少なくないし、中でも優れた研究業績を残した先輩も数多くいる。他方、異文化理解、仏教・キリスト教対話、文化財保存、不登校対策など、社会問題に努めて関心を寄せ、貢献している先輩もいる。しかし、目に見える著書や社会貢献を残さなかった教員もいたために、景気が悪化した近年、業績の外部評価、助成金の減額、授業の負担増、教授法を強化するFD等が教員に課せられている。つまり、一昔前の学者の贅沢や怠慢のお陰で、社会の目も文部科学省の態度も大変厳しくなっているとも言える。

現在、京大の文学青年は昔ほど多くはないが、そのような学生に向かって正直に言わねばならないことがある。趣味の読書と感想文程度の「論文」だけで大学教員をやれる時代は終わりつつある。メディアの刺激に馴れきった、授業をつまらながる大勢の学生に向かって行うエンターテイナー並のプレゼン術、経営者並の助成金収集力、事務職員や秘書並の書類作成能力、管理職並みの会議の運営能力、就職指導など学生の個人指導に時間をかけるカウンセラー的な能力、そして自分の自由時間を犠牲にしても絶えず社会に向けて生産的な研究出版活動続ける強い計画性と実行力、これらの全てを持ち得ないと今後の大学教員には適さない、と覚悟する必要がある。ほぼ30分おきに、失職したサラリーマンが自殺を図っているような厳しい競争社会では、本を読むくらいで給料を税金からもらう余裕がないのである。

文部科学省や給料のことまで持ち出すのであれば、30年前のデモのことを思い出す。安保や反戦デモから出発して、ベトナム戦争が終



京大院生時代 仏教大学で非常勤講師をしていた頃
(1978年)

わった75年以降も、京大生の政治的な関心が高く、「授業料値上げ反対」などのデモを続けた。誰にとっても戦争は嫌なものであるし、授業料を上げずに済むのであるならば、上げて欲しくないであろう。ただし、アメリカの学生運動を経験した留学生の小生には、京大の学生デモはなんだか幼稚に見えた。当然ながら、公共政策を左右しようと思えば、その決定権を握っている人物を確認し、彼らに影響を与えないと何も変わらない。つまり、デモは国会議事堂前ですれば、議員の目と耳に入り、影響の可能性もあろうが、京大の教室内で騒いだところで、国策には何の影響も与えない。また、抗議運動には「取引条件」と「現状分析」も不可欠である。「取引条件」としては、例えばジョンソン大統領に対して、「停戦を命じないと、過半数の国民はライバルのニクソンに投票することを約束している」というように、声のみならず、結束した行動力を駆使しないと無視される。「現状分析」としては、激しいインフレにより、全

ての物価が上昇している場合、大学の運営費や出費が同様に上昇するのは致し方ないかも知れない。授業料値上げ反対とは、その差額を国民の税金でまかなうと希望するものである。従って、「国立大学は国に対してこれだけの貢献をするので、それを認めて、国家として投資してもらいたい」、あるいは「授業料が低く抑えられていたお陰で国立大学の卒業生は日本のためにこれだけの経済的・教育的な効果をもたらし、いわばその恩恵の恩返しをしているが、裕福な学生しか入れない大学にしまったら、卒業生は国のためではなく、自分だけのために努める傾向になる。公共教育を有り難く思い、後々恩返しをする気持ちを持つ学生のための大学を守れ」というような論理は、通用するかも知れない。インフレ、納税者、投資と収益を分析せず、ただ単に「値上げ反対」と叫んでも、「馬の耳に念仏」に終わってしまうように思われた。

21世紀の京大は、あの紛争時代とは色々な点で異なる。政治に対する関心は薄れ、また「教養を身につけたい」という文学青年も減ってしまった。その反面、環境問題、国際協力、高齢化と年金制度の破綻など、実社会の問題に対し、関心を示す京大生が以前よりも多くなっている。小生の授業を受講する学生たちの中にも、理想的な世界の実現が難しいことを認識しながらも、現実問題の改善に地道に取り組もうとする者が多くいる。彼・彼女らこそが、時代の変化を反映しているかも知れない。小生自身はといえば、京大生であったことをいつまでも誇りに思えるように、そして誇りに思える京大生を一人でも多く送り出せるように、微力ながら頑張っている所存である。

(カール・ベッカー)

曲折 いまとむかし

堀 智孝（自然科学系）



生来、時間に対してケチにできている。両手ですくい上げた泉の水を、一滴も漏らさず乾いた喉に運ぶように、手にした時間に吝嗇を決め込み、上手に貯め置いて、必要

なときに、ぱーっとつかいたいと思っている。京都から西と東に、100kmを目安にして、これより遠方に仕事で出かけるとき、日帰りを避けて彼の地に一泊するのは、このためである。

このところ東京に向かうことが多い。彼の地で用事が済むと、その夕刻を渋谷や新橋界隈で過ごし、翌朝、ハチ公から明治神宮に出かけたり、千代田の外堀を半周したり、茗荷谷の森で野良猫と戯れたり……、東京駅を思い出すのは、陽がとっくに傾いてからである。

学生時代からこの悪い癖が治らず、好きなことには時間を自在につぎ込むのに、厭なことがあると時計を速く廻してきた。しかし、今日は不幸にも、この我が儘が許されず、たった3時間の会議のために、早朝から京都・東京間を新幹線で往復するはめになった。自宅に戻って、肘掛け椅子に深く沈んでいるのに、からだにしみこんだ列車の揺れはまだ続いている。全身が椅子ごと、すーっと、底なしの中空に吸い込まれるような不快な揺れもある。

学生時代を三位一体にして一語で表現すれば、「授業・クラブ・副業」となる。そして、この時代を思い返すとき、延ばす、縮める、止める、

消す、貯めてつかうといった、時計に施した細工が次々と懐かしく浮かんでくる。

授業：ゲーテ著『イタリア紀行』が教材の、ドイツ語クラスが印象深い。辞書に首っ引きで用意した和訳を、出席簿の順に仲間が披露、授業担当のU先生は懇切に文法を解説し、誤訳を正して下さったが、初学生の私は単に仲間の部分訳をつないでいるだけであるので、文脈を追うのは難しかった。潜水艇で太平洋を横断しているような、いらだちとあきらめを混ぜ合わせたような、苦しい時間を過ごした。

1年間の辛抱の甲斐あって、何とか試験に合格できたので、これを記念して、岩波文庫『イタリア紀行』（相良守峰訳）を買い求めた。お恥ずかしい話であるが、このとき初めて、『イタリア紀行』が教材に選ばれていた真の理由が飲み込めた。早速時計を止めて、春休みを返上、新学期を忘れて、ゲーテの著作を読んだ。お蔭で多少の教養も身についた。記憶に残っている表現を得意げに引用して、仲間を悔しがらせたこともあったが、後年、職場の同僚から「原文で引用しなくっちゃ」と揶揄されたのを機に、この自慢は止めた。

U先生の懇切な指導に感服した仲間の一人は、後に婚約者を連れてU先生宅を訪ね、結婚の媒酌を請い、生涯の思い出にしたと聞いた。私は、社会人になってから書店に頼んで、C. H. Beck社の廉価版Goethe Werke全14巻を手に入れ、その第11巻にItalienische Reiseが所収されていることを確かめたが、目指すところの

フレーズが、どこに埋もれているのかが簡単に見つからず、訳本との対応は遅々として進まない。書棚の埃を払いにくる家内にも言い訳して、「今度生まれ変わったら、ドイツ語の習得に力を入れるよ」と伝えているが、減らず口の彼女は、「まずは、人間に生まれてくるのが大事ですね」と責めてくる。

クラブ： 入学してまもなく、「膳所高校の出身者は、全員、神陵ヨットクラブに入るのだ」という、意味不明の噂話を耳にし、おそろおそろ琵琶湖畔の艇庫に顔を出した。このときクラブは全盛、先輩1人が新参2人を一つのヨットに乗せて練習に出るが、2時間足らずで帰港して、次の新参2人と交代する。クラブは慌ただしく、また、熱気に溢れていた。反面、妙に冷めているところもあって、舟に乗るたびに、衝突回避のルールと転覆したときの処置を丁寧に教えていた。

ヨットの魅力を一言で記すのは難しい。当時、ヨットに興味をもった多くの人々は、女性歌手が唱っていた民衆歌「♪この広い海いっぱい 往く船を 一つ残らずあなたにあげる 白い帆にイニシアル付けて」や、男性歌手による「♪もしもこの舟できみの幸せ見つけたら すぐにかえるから 僕のお嫁においで」に、惹かれたのかも知れない。確かに沖合に群れ遊ぶヨットは、きれいな飾りや宝物に見えるし、岸を離れた小舟は、俗世と一線を画す空間を創るので、人生のよき伴侶を誘惑するには、恰好の雰囲気醸すのだろう。

風域に入ったヨットに、こんな悠長さはない。クルー（同乗者）は、舳先が割り裂いた大波を間断なく被り、水泳さながらにタイミングを計って、呼吸を整えている。それでも、「もっと巧く波を切ってくれよ」との不平も漏らさず、スキッパー（操舵者）を信じて黙々と補助帆で

風の流路を整えている。日頃はことごとく意見が違って、歩み寄りのない激しい議論に立ち向かう隣人であるが、互いに相手を信じての共同作業は、掛がえのないヨットの楽しみである。このこともあって、クラブの時計は、軽くぜんまいを巻くと、いまでも快い歯車の響きを返してくる。

副業： しばしば家庭教師を頼まれた。いくらかの臨時収入は魅力であるが、収益よりむしろ、(当時は塾や予備校の猖獗がなかったから)自宅に居る高校生や中学生に、教室で習わなかったような裏話や解き方を披露して、彼らの笑顔を引き出すことを愉しんだ。この社会貢献は、大学卒業以来、時計が止まったままである。現役を引退したら、当時の生徒を訪ね、もう一度、古時計を動かしてみたい。

学生時代は、「昨日のことは忘れる、明日のことは考えない」を呪文のように唱えながら、事の善悪次第を解さないままに、自分にとって不都合な時間は切り捨て、気に入ったものだけを取り入れ、自由に延ばし、縮め、曲げ、貯め、つかっていた。しかし、この時を刻む時計を逆に進ませる細工はできなかった。残念ながら、いまでも未だ、できないでいる。

(ほり としたか)

研究・教育活動紹介

文化財修復、そして古建築研究

窪寺 茂（文化環境学系）



2004年10月より人間・環境学研究科に着任（客員助教授）した窪寺です。所属は奈良文化財研究所（文化遺産研究部建造物研究室長）で、昨年4月に現職に就きました。以前は財団法人文化財建造物保存技術協会に所属し、28年間わが国の文化財建造物保存修復の実際を最前線で実践していました。修復の実際はまさに建築工事ですが、建築に関する歴史的技法をはじめとする様々な調査研究も必要となります。私は漆塗や彩色をはじめとする塗装技法に関する歴史的技法解明を研究の中心に据えています。文化財修復にとって歴史的技法の調査研究がなぜ必要となるのかを皆さんに伝えたいと思います。

ところで、わが国では明治10年代から社寺や陵墓、史蹟などを対象とした国家レベルによる文化遺産の保存が始まり、明治21年(1888)に臨時全国宝物取調局が宮内省に設置されると、国家による古社寺調査が本格化します。明治30年(1897)にはわが国最初の文化財保護法とみなされている「古社寺保存法」が制定され、国家による文化財建造物の修復はこの時からスタートします。爾来この保存修復は継続され、その成果は建築史研究に反映されました。今日行われている修復方法の基本は、明治以来今日まで受け継がれてきています。

では修復はどのように行われているのでしょうか。一言でいうと、修復対象の建造物が建築された当時と同じ方法で行われることを原則としています。文化財の修復を通じて当時の技法工法を将来に伝承することに修復意義の一面があると考えているからです。ところが、過去の技術を再現的に実践することは容易なことでは

ありません。多くの技術は社会の推移とともに変化しているからです。高度に発展・発達した科学・工学技術に基づき形成された現在の社会に目を向ければ、手工業的社会における技術と現在の技術との間に大きな乖離が見られることは想像に難くないでしょう。私たちが古くから伝承されていると思っている技法の中には、実際は明治時代以降のものも含まれています。つまり、私たちが理解しているつもりの歴史的技法も、一步踏み込むとその実態は不明の点が多くありません。このことに私が気付いたのは今から20年ほど前のことでした。たまたま担当した修復現場でのことで、以来、木造建築に対する色付け技法の研究を積み重ねて来ました。そのなかで、現在に伝承されていない、つまりかつての時代に普及し、その後消滅した色付け技法の研究も当然行っています。

さて、歴史的技法研究にとって最低限必要なものは、1)当時の技法が遺存するモノ自体が存在すること、2)技法および材料に関する広範な古文献が存在することでしょう。この二つの情報を基にして行う研究は、モノと情報に対する精緻な観察力と的確な理解・判断力を必要とします。したがって、研究は長期に及ぶことになりますが、なかなか興味深いものです。モノと文献から繙く研究は、思いもよらない方向に問題と関心が及ぶこともあります。古建築はかつての文化の総合体として存在しているからです。

そう、研究にとってもう一つ必要なものがありました。それは想像たくましい発想力。そう私は思っています。文化遺産の研究は確たるフィールドが必要となります。このフィールドをどこに見出すかは学生の皆さんです。文化遺産学、なかでも古建築に興味を抱いた方はどうぞ私を訪問してください。この学はとても広範です。（くぼでら しげる）

スパイ・ハント

ブライアン・マサル・ハヤシ（国際文明学系）



1945年6月、中国の西安において風変わりな一団がリョンギ・ハム（Ryongi Hahm）の元へ集結した。戦略事務局（Office of Strategic Services）の大尉であるハムには、60数名の韓

国人の部下がいた。彼らの多くは、ハムの下に配属される前は、ウィスコンシン州キャンプ・マッコイに捕虜として収容されていた、日本帝国陸軍の徴集兵だった。また、マサチューセッツ州ケンブリッジ出身のハムと同じように、アメリカ生まれか、又はアメリカ育ちの少数の韓国人将校がハムを補佐した。ハムのキャンプから北西にわずか15キロメートルの所には、チヨキ・イケダ中尉（ハワイ出身の日系二世）がおり、西安の戦略事務局とハムの対スパイ活動を守る役目を担っていた。そのスパイの日本陸軍側までの逃走経路は、わずかに150キロメートルだった。保安の責任者であるジョン・ウォック中尉（ハワイ出身の中国系アメリカ人）に厳しく監視された職員が、昆明にある戦略事務局本部とハムの連絡を任されていた。

スパイに関するこのような話が、第2次世界大戦後の人種・民族関係の変化という私の研究テーマとどのように関連するのだろうか。およそ一世紀にわたって、よそ者として扱われてきたアジア系アメリカ人が、なぜ「白人」になり得たのだろうか。日本とアメリカの置かれた状況は異なるとはいえ、社会学者、ジャーナリストや政治家、社会の動向などが、人種的なマイノリティを主流社会に属する市民へと変化させたという重要な役割を果たしていることは周知のことである。しかし、このような人種の形成

過程においてマイノリティ出身の軍人が果たした重要な役割は見逃されている。ジェームズ・ボンドのような存在が、この過程を解き明かす鍵となるだろう。このようなスパイの活動やその影響を明らかにするには、世界各国をたどらなければならない。ワシントンには、戦略事務局や中央情報局（CIA）に関する膨大な資料が保管されており、研究者が閲覧することができる。機会がある度に私はワシントンまで飛んで行き、スパイに関する資料を探し出し、時にはアメリカ国防総省の近くでテロ警報といった007の並みの危機にも遭遇した。ロンドンなどの刺激的な都市は、ライバル関係にあるスパイ組織の記録があるため、私を惹き付けるし、北京、台北やソウルにもスパイに関する見逃せない文書がある。サンフランシスコ、オアフ、ニューヨークやフィラデルフィアなどのアメリカの都市にも、アジア系アメリカ人のスパイを育てた背景であるエスニック共同体を知る上で必要となるコミュニティ新聞や教会の記録といったその地域特有のデータがある。

しかし、私の研究活動はすべてがジェームズ・ボンドのようにいく訳ではない。まず第一に、時差ぼけは私の頭を朦朧とさせるし、さらに最新式のステルス車もない。その上、とある諜報機関が研究活動のための資金を払ってくれる訳ではないため、非常勤としても働かなければならない。私のアジア系アメリカ人のスパイ搜索は、有名なスパイであるジェームズ・ボンドのように高級レストランやホテル、車や時計のための巨額な資金を必要としているのではなく、時に私自身をジェームズ・ボンドに重ねながら一日中座って資料を探す図書館への旅費を必要とするのみなのだ。

（ブライアン・マサル・ハヤシ）

二つの「セルビア」

三谷 恵子（文化環境学系）

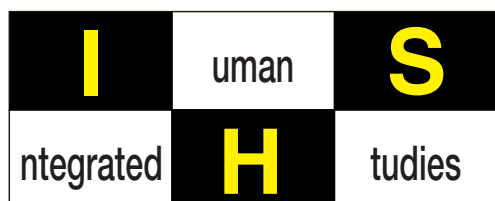


世界の言語の中で、英語を筆頭にいわゆる「大言語」とよばれる言語があります。言語人口が多い、広い地域で国際語として使用される、などがその特徴で、スペイン語、中国語、フランス語、アラビア語など本学の第二外国語の科目となっている言語の多くは大言語の部類にはいると言えるでしょう。私が全学共通科目で担当しているロシア語もそのような大言語の一つ（であるはずなのだが最近怪しくなってきたような気も…）。しかし地球上に存在する言語の数から言えばこのような大言語はごくわずかで、残りの大部分は「少数言語」と呼ばれる極小微力の言語です。私の研究対象であるソルブ語もそのような少数言語の一つ、というより厳密には「二つ」で、ドイツ東部にすむスラヴ系少数民族ソルブ人によって使用されており、現在の言語人口は全体で2万人余とされています。「二つ」と述べたのはこの少数言語がさらに言語特徴の異なる二つのグループに分けられるからで、より少数のグループの話者の数は現在7千人ほど、しかもそのうちの7割は60歳以上の高齢者という、言語維持の観点からするとかなり危機的な構成です。もちろん世界にはもっと深刻な状況下にある、言語版「絶滅危機種」が何千とあり、今この瞬間にも、最後の話者が絶え地上から永遠に消滅しようとする言語があるはずなのです。ある言語が少数言語として衰退しやがて消滅していく背景にはさまざまな歴史や社会的事情があります。ソルブ語の場合にはドイツを中心とする中欧の歴史が密接に関係しており、これを抜きにソルブ語の歴史を語ることはできません。また言語そのものも、ドイツ語や近隣

のスラヴ諸語と密接な関係にあります。このような歴史的、社会的要素を考慮にいれながらソルブ語の歴史や構造を、その他のスラヴ諸語と比較しながら研究するというのが私の研究テーマの一つです。

ところでソルブというのは英語の Sorb をカタカナにした言い方ですが、実はソルブ人は自分たちのことを Serb（単数）、Serbja（複数）つまりセルビア人と言います。「セルビア」といえばバルカン半島の旧ユーゴスラヴィアを構成していた主要民族の名称、ではソルブ語でそのセルビア人はどうなるかというと「南のセルビア」、一方セルビア語でセルビア人は Srb「スルブ」そしてソルブ人のことは「ラウジッツのスルブ」（ラウジッツというのはソルブ人が居住するドイツの一角を指す地名）と言います。これらの名称の歴史的関係については長い話になるので割愛するとして、何にしても紛らわしいこのもう一方の「セルビア」を含む旧ユーゴスラヴィア地域の言語文化が私のもう一つの研究領域です（研究を始めた順序からすると旧ユーゴ研究の方が先なのですが）。ここもまたさまざまな少数民族と言語が住み、互いに似たような、けれどそれぞれに異なった文化を形成してきた地域です。この地域を含むバルカン半島の言語はそもそも…などと始めると収拾がつかなくなるので、ここでは汲めども尽きぬ泉のような、はたまたいったんはまると二度と抜けない底なし沼のような、興味尽きない研究対象であるとだけ述べておきましょう。というわけで、まだ国土の7割で地雷撤去を完全に終了していないという地元のニュースを聞きながら、「戦争なんか絶対にしちゃだめなのよ」と思いつつ、2005年の春私はまたも旧ユーゴスラヴィアの町を旅していたのでした。

（みたに けいこ）



編集後記

◆本号の特集「学生時代の思い出」では、9名の先生方に、30年から40年にわたる年月を遡って、学生・院生時代を振り返り思い出を語っていただきました。

勉学や研究、留学、サークルその他の活動、そして人との出会いなど、多彩な経験談が披露されています。そこには、一昔前の時代の雰囲気が漂っている一方、現在の同年齢の学生と共通した「若さ」も漲っています。学生の皆さんが「いま」をいかに過ごしているかを、考えてみるヒントにもなることでしょう。

◆「特集」ならびに「研究・教育活動紹介」の原稿をご執筆くださった先生方には、お忙しいなかご協力いただき、厚くお礼申し上げます。

◆本学部・研究科広報に関してご意見がございましたら、当委員会までお寄せください。今後の編集活動の参考にさせていただきます。

(廣野記)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会